

第9章 支援からまちづくりへ

宮城県・Color Calibrations（セクマイ・ダイバーシティ栗原）

白鳥颯也さん



実施日：2019年8月21日 聞き手：杉浦郁子・前川直哉

実施場所：仙台市市民活動サポートセンター（仙台市）

【プロフィール】

1993年、宮城県登米市生まれ（インタビュー時25歳）。栗原市で育つ。2013年4月、大学進学を機に仙台市で一人暮らしを始める。2017年4月「セクマイ・ダイバーシティ栗原」を立ち上げる。大学では心理学を専攻。卒業後は、主に障害福祉の分野の仕事に携りながら、社会福祉士の資格取得を目指している。

1. 高校時代

◆学校に行かなくなる

地元の高校に入ったのですが、高校2年ぐらいから学校に行かなくなりました。

小学校の3年生の頃から「自分は勉強ができないから、もう勉強はしない」と勉強をあきらめていたところがあったのですが、それでもだらだらと続けていて……。高2で何かはじめて、完全に勉強をしなくなり、学校にも行かなくなりました。「もう働こうかな」と思っていました。でも、親から「高校だけは出てくれ」と言われ、仙台市の通信制の高校に通って、卒業しました。

通信制の高校は、本当に自分のためになりましたし、先生との良い出会いもありました。不登校の生徒、勉強が嫌いな生徒、個性的な生徒が集まっていて、先生方もそれを理解して関わってくださる。自分の場合も、小学校か中学校か、どのレベルからかはわかりませんが、一から勉強に付き合ってくださいました。それで、「もう一度、勉強してみようかな」「大学に行ってみようかな」という気持ちになれました。それまでは、勉強にはまったく興味がなくて、学校以外で本を読むこともほとんどありませんでした。日常的に活字にふれている今の生活が、考えられないような状態でした。

◆福祉分野に対する関心

仙台の通信制に通っていたとき、「何で自分の人生はこんなうまくいかないんだろう」と思っていて、それが発達障害に関心をもったきっかけでした。発達障害への関心が、後々、障害全般に広がって、いま仕事にしているような福祉分野に関わりたい、と思うようになり

ました。

「自分の人生は、これからどんどん駄目になっていくんじゃないか」と考えていたときに仙台に来て、初めて何人ものホームレスを見かけました。栗原市では1人しか見かけたことがなくて、珍しいものだと思っていたのですが、仙台には駅にも街にも普通にいます。それを目の当たりにして、「自分もこうなっていくんじゃないか」という不安が……。ホームレスの人たちが何か他人じゃないような気がして、貧困の問題に関心が向かいました。「社会的弱者」とか「生きづらさ」といったテーマは高校時代から身近にあって、自分もそちらの立場にいるように感じていました。

高校生のときは、性的マイノリティにシンパシーをもった経験はないのですが、「自分が男らしくない」ということで、「ジェンダー」「女性差別」「男性差別」などについてウィキペディアで調べたりしていました。それから「同性婚ができないのはなぜだろう」と思って、大学入学前にネットで調べた記憶があります。

◆大学では心理学を専攻

大学で心理学を専攻したのは、自分の弱点を克服したいと思ったからです。自分を理解したい、他人や社会と上手く付き合いたい、その方法を学びたい、という動機です。安易な考えでしたが、「そうすれば、めちゃくちゃ人生がうまくいくんじゃないか」「お金を稼ぐのは、自分の弱点を克服してからだ」と考えていました。

対人関係もあまり得意ではありませんでした。何というか、変わっていた。大げさに言うと「クレヨンしんちゃん」みたいな感じ。小さい頃は、多動でずっとしゃべっていました。「給食中にしゃべると、みんなの食事が進まないからしゃべるな」と言われるほど、「面白い」と思われていたときもありました。

そういうふうに落ち着かない、動き回っている、ずっとしゃべっているという時期もあったんですけど、だんだん人と話せなくなっていきました。コミュニケーションがとれない。みんなが関わってくれたときは遊んでも、自分から他人と関わることはない。どこにも所属しないような感じで、友達に誘われても1人で絵を描いているとか、自由気まま。社会性がなかったんだと思います。友達も少なからずいたのですが、「変わってるね」とよく言われました。

2. 「セクマイ・ダイバーシティ栗原」を立ち上げる

◆卒業研究のテーマ

大学1年生のときに、思春期ピアカウンセリングのボランティアをやっていました。大学ではなく、外部の養成講座を受けて修了した人が、小中高の児童生徒に同年代のピアとして寄りそいながら、生殖や性感染症だけではなく、人間関係や将来設計、ジェンダー、性の多様性などの従来の性教育に留まらない性、つまりセクシュアリティに関する情報を共有する活動です。もともとジェンダーは興味があった分野で、養成講座でも少し勉強しましたし、ピアカウンセリングの活動のなかでも、そういったことを他者と話し合う機会がありま

した。また、講座でセクシュアリティやマイノリティの話があり、関心を持ちました。

それからしばらくは、セクシュアリティや性的マイノリティは、関心のある一分野ではあったものの、それに自ら深く関わることは、ありませんでした。大学3年生のときから行っていた、性的マイノリティとは関係のないボランティア活動のなかで、当事者であることをカミングアウトしている人に初めて会いました。

また、仙台市市民活動サポートセンターの助成金の説明会に参加したら、「Anego」さん（「あらゆるセクシャリティの人が尊重されることを目指す」仙台で活動する団体）も参加していて、身近に性的マイノリティに関する団体があるんだと知りました。短期間に当事者と会って話を聞く機会が重なり、関心をもちましたし、現実的かつ社会的な問題だと感じて、卒業研究を通して何か役に立てることがあるのではないかと思いました。

◆卒業研究

大学の卒業研究では、いろいろな団体に連絡を取って、質問紙調査に協力してもらいました。「東北レインボーSUMMER フェスティバル 2016」があった時期で、そのときにお会いした団体を含めると、ちょっと大雑把ですけど、10から20ぐらいの団体の代表に直接お話しして、協力を依頼しました。関西の団体は5つぐらいだったと思うのですが、実際に足を運んで、お話ししました。関西の「レインボーフェスタ！」のアンケート調査ブースに来た人に協力をお願いして、そこで回答していただいたり、ネットで広めていただきました。協力くださった方は200を超えていて、有効回答数は199と沢山の方々にご協力いただきました。

卒業論文のタイトルは、「セクシュアルマイノリティのカミングアウトにおけるセクシュアリティに焦点化した被受容感が本来感、自尊感情に及ぼす影響」です。カミングアウトが生活に大きく関わる人である家族、または職場と学校等の人に受容されたと感じているか否かで、自尊感情と本来感がどう変わるか、ということの研究しました。自尊感情には、本来感と、人と比べることで得られる優越感が含まれます。優越感は外的な要因に大きく左右されるため不安定なものです。それに対して、本来感というのは、「本当の自尊感情」というふうに言われたりもするのですが、自分自身で自分らしさを感じている程度のこと。相対的なものではなくて、絶対的な自分を受け入れている度合い。たとえば、自分より成績がいい人が現れたことによって揺らがないような、人と比べることで左右されにくい安定した特性で、大切な人にありのままの自分を受け入れられることによって高くなる特性です。本来感が高いほど、Well-Being が促進される、自分自身の問題を自分自身で責任を持って解決する自立性、自分を成長させたいという意欲などが高くなることが知られています。自尊感情だけでは、そのような効果は、見られません。

カミングアウトを受け入れられていると感じる程度と自尊感情及び本来感の相関関係を分析した結果、家族からカミングアウトを受け入れられていると感じている程度が高いほど、自尊感情や本来感が高い傾向にあることが分かりました。職場や学校等の場合、有意な相関が示されませんでした。この調査には、色々課題があると考えますが、セクシュアルマイノリティの場合、家族からセクシュアリティを受け入れられることが、自分らしさを感

じて生きる上で重要であることが示唆されました。

◆栗原の活動を立ち上げるまで

調査のとき、お世話になった団体の一つに、小浜さん(本冊子にインタビュー掲載)が代表をしている「レインボー・アドボケイツ東北」があったのですが、小浜さんに「せっかく調査したなら、続けなさいよ」と言っていたいただきました。小浜さんの活動のなかに「セクシュアリティ夜間学校」というのがあって、そこで卒業研究を発表する、IDAHOのときに「同性愛の脱医療化の歴史」というテーマで、アメリカ精神医学会の発行するDSM(精神疾患の分類と診断の手引き)を基にまとめて発表する機会をいただきました。それから、HOMEY(本冊子にインタビュー掲載)など、様々な交流会にも参加していました。

卒業研究に取り組んでいたときから思っていたのですが、やはり地方は理解が進んでいないし、自分の地元の栗原市を思い浮かべたときに「ちょっとやばいな」と。偏見とか、差別とか、そういったものが当たり前にある地域社会なので。何か力になりたかった、というか、偶然栗原市に生まれて、偶然LGBTについて学んだ自分が「何かやるっきゃないでしょ」ぐらいな気持ちで、「セクマイ・ダイバーシティ栗原」を立ち上げました。

◆交流会を呼びかける

参加させてもらった交流会などのイベントを参考にして、「こういうことをすればいいかな」と、あまり深く考えずに交流会を始めました。まず、SNSのアカウントを取ったり、ホームページを作ったりして、情報発信をしました。それから、栗原市の市民活動支援センターにチラシを貼りました。

来てくれる人がいるかどうか、自信がなかったので、セクシュアリティはとくに限定しませんでした。一般的にセクシュアルマイノリティと言われるSOGIに関してマイノリティである人だけではなく、性的嗜好などに関してマイノリティである人も含め、あらゆる多様な性を持つ人に来てほしいと思っていましたし、だれが本当の当事者かどうかもわかりませんし、アライの人も含めて、誰でも来てほしいって。「同じ当事者の人と話したい」という当事者のニーズはあると思っていましたが、セクシュアリティごとの交流会は人が集まってから、と考えていました。でも、まだやれていないのですが。

人が集まると、場をかき乱す人はどこにでも現れるので、それにうまく対処できるか、ということは、心配していました。どんな人でもウエルカムだし、どんな人でも居場所として使ってほしい、と思いつつ、ある人が来たせいで他の人が来たくなくなったらどうしよう、という不安はありました。幸い、そういうことは起きてはいないのですが、まとめる力やコミュニケーション能力に自信がないので、心配でした。

ネットを見て、2回目に、栗原の人ではありませんが、近くの地域から交流会に来てくださった方がいました。交流会は、今はちょっとサボっていますが、以前は2カ月に1度ぐらいの頻度でやっていて、人数は、自分をふくめて2人から3人でした。いちばん多かったのは、年末にやったクリスマス的な交流会です。一度でも来たことがある人がお互いに会えるように、日程を合わせました。そのときは、自分も入れて6人来ました。平均年齢は、

30 歳くらいで、皆さん当事者です。県北の人や、仙台から遊びに来てくれた知り合いもいました。

◆交流会で気をつけていること

仙台とは違った活動を目指した、ということは、あまりないのですが、栗原の人が来にくいとは思っています。実際、近隣の地域から来た方も、「地元だったら行かないよ」というふうに言っていて、「そうだろうな」と思って。その方が住んでいるところは田舎なので、もし交流会があっても行きにくいと思います。

去年 (2018 年)、栗原市南部商工会が主催している「まちのたからばこ」というイベントでセクシュアリティをテーマに市民講座をしたときに、初めて栗原市の人 came ました。一般市民が自分の得意分野を教える講座や教室を開く、というプログラムに申し込んだんですけど、その講座をするまでの 1 年以上、栗原の人は交流会に来なかったです。仙台の交流会のほうが、人の目につきにくいという意味では行きやすいと思いますが、栗原からは遠いので、物理的には行きづらいです。

交流会の場所は、オープンにしていません。クローゼットの人に来る、というのが前提になっているので、参加予定の人だけに場所を伝えています。「誰かに会ってしまったら」という心理的な不安を取り除きたいので、誰にも見られず来られるような場所がいいのですが、今は、人通りのある建物でやっています。そこは変えていきたいと思っています。

「ここでやっていますよ」というふうに、レインボーのものをぶら下げている交流会もあるのですが、自分はしないようにしています。部屋に入るところを誰かに見られて「当事者かもしれない」と思われる可能性もあるので、そこは過剰なくらい、気をつけているつもりです。

他の団体の方からお勧めされて、年末のイベントはカラオケでやってみました。皆さん、楽しそうでしたし、緊張して行くような場所でないのも、いいかなと思っています。「今度、飲み会しようよ」という話もよく出るのも、話が漏れない完全個室の居酒屋を探しています。

◆アライとして活動すること

自分は「シスヘテロでいいのかな」と思っています。でも、ジェンダー的には典型的でない部分があるのかなと思いますね。とくに子どものときは、ピンクが好きで、何かを買うときも、男の子はみんな青なのに、自分だけ赤とか、そういうところがあって、「あまり男らしくない」と言われてきました。

卒業研究の調査に協力してもらった団体に誘われて、夜のパーティに参加したことがあったんですね。いろいろなセクシュアリティの人が来るから、ということで行ったのですが、20 人から 30 人ぐらい、ゲイの人しかなくて、そこに自分がぽつんと 1 人でいた。ヘテロだと知れたら歓迎されないんじゃないか、という強い不安がありドキドキしていました。実際の社会とは反対の状態を体験した訳ですよ。でも、冷たい扱いをされたことはまったくなく、皆さん、快く接してくださいました。

自分のなかでも、当事者の気持ちはわかり得ない、と思っています。そこは、悔しいとこ

ろですよ。共感はできるのですが、当事者に「その気持ち、わかるよ」とは絶対に言えないんだろうな、と。だから、当事者の人には自分を社会資源としてぜひぜひ使って、というスタンスでいます。

栗原の交流会に来てくださっている人は、基本クローゼットで、活動したいけれどできない、という当事者も多い。そういうなかで、自分がオープンにして、顔も名前も出しながら広報に回れる、直接に会って話せる、というのは大きいかな、と思います。

3. 栗原市での活動

◆行政への働きかけ

栗原市では、今年、市民協働課から小浜さんに声がかかって、講演会兼栗原市職員等の研修会が実施され、その講演会で、市長からも「性的マイノリティに関して栗原市として取り組んでいきたい」と聞くことができました。宮城県の共同参画社会推進課の職員で、性的マイノリティに理解があり、且つ私の中学時代の先生だった方が栗原市などの市町村に積極的に働きかけてくださっていたことが後々分かりました。パブリックコメントを出して、栗原市の自殺対策計画のなかに、性的マイノリティに対する関係機関との連携による各種相談窓口の周知や市民への普及啓発、アンケート調査における性的マイノリティの課題を把握する質問項目の設置について、明記してもらったこともあります。

そういうときは、「セクマイ・ダイバーシティ栗原の白鳥です」と名乗っています。住民票は栗原に置いたままで、一応市民ですが、「市民の白鳥です」より、団体を名乗ったほうが声は届きやすいのかな、と思います。

いろいろな団体の活動を見たり聞いたりして、自分の活動の参考にしていますが、やっぱり小浜さんを一番モデルにしていますね。小浜さんがパブリックコメントを積極的に出したり、直接、市に働きかけたりして、実際に行政の計画に盛り込まれていったとか、そういう様子を見て、参考にしています。

栗原市は、ちょっとした動きをするだけでも、変わっていきますね。まだ何も始まっていないので、始めやすいのでは。たぶん、「今、LGBTとかよく聞くから、何かしなきゃいけない」といったことを行政も考えて始めている。そこに少し働きかけると、自治体としても動きやすくなるのでは、と思っています。

◆「くりはらチャレンジL」に入会

栗原市に、男女共同参画推進に関する活動や栗原市の課題全般に関する活動をしている「くりはらチャレンジL」という団体があります。栗原市の男女共同参画含む社会問題全般に関して、市議との懇談会や勉強会を開催したり、講演を企画したりしている団体なのですが、そこに今年から自分も入会しています。市民協働課など、行政とも関わりのある団体なので、その会員として市の職員にお会いすることもあります。会員の皆さんには、LGBTに関心のある方、理解のある方が多く、いろいろと力になってくれます。

◆市民活動支援センターとのつながり

商工会主催のイベントでセクシュアリティ講座をやらせてもらいましたが、そのイベントは、栗原市の市民活動支援センターに紹介してもらいました。支援センターは、「こういうところにポスターを貼れば、みんな見てくれるんじゃない」とか「こういうイベントがあるから、出てみたらいいんじゃない」とか、気にかけてくださって、応援してくれます。ポスターも、期限が過ぎるとどんどん貼りかえられていくのですが、うちのポスターはずっと貼ってくれています。

商工会が作ったイベント・アンケートは、「男性」「女性」以外に「その他」が設けられていて、驚きました。自分が活動を始める前から、支援センターが商工会に働きかけて、アンケートの性別欄が変わったようなんです。支援センターには、もともと理解があったのだと思います。

商工会主催イベントでの講座は、「数打ちゃ当たる」と思って、大量に日程を組みました。講師は自分でやり、1回の講座に聴衆が1人か2人でした。商工会の人は、見に来ていないので、どう思っているのかはわからないですね。しかし、実際に講座をさせてもらっているので、理解はあるのだと思います。

◆地元で顔を出して活動する

ネットだけでなく、『河北新報』や商工会イベント「まちのたからばこ」のチラシに載せてもらって、情報発信をしています。地元で顔を出して活動する怖さは、今はもうほとんどないですが、最初の頃はありました。当事者だと思われることの怖さを感じて、自分も完全にフォビアが消えているわけではない、と思いました。また、実際には当事者ではないので、そこを誤解されて何かあったら、という心配もありました。

家族も自分の活動については知っていますが、とくに関心もなく「へえ」みたいな感じ。あまり仲良くないことが、逆に良かったのかもしれない。別に親と対立しているわけではないですし、実家に帰ることもありますが、会話があまりないんです。

地元には、数人ですけど連絡をとる友達がいて、自分の活動の話をすることはあります。直接話さないような地元の友達ともSNSでつながっています。みんな「いいね」を押してくれますよ。「おまえ、何でそんなことやっているんだ」というふうに言われたこともないです。自分が話をしたことで、性的マイノリティに対してポジティブでなかった友達が、考えを変えてくれたこともありました。

4. LGBT 講師派遣事業

◆地域で LGBT の課題に取り組む若手リーダーを応援するプログラム「diverseeds」に参加

今年から「LGBT 講師派遣事業」を始めました。これは、自分が講師をするのではなく、すでに「当事者スピーカー」として実績のある方々を、栗原市で実施される講演や授業などの講師として紹介し繋げる、という事業です。

これを始めたきっかけは、東京の「認定 NPO 法人 ReBit」の「diverseeds」という研修

に参加したことです。「diverseeds」は、地域のユースリーダーを育てる事業で、約半年間、オンラインで研修を受けたり、実際に東京に行ってみんなで勉強したり、自分の活動計画を作ってアドバイスをもらったりしました。

東京に行く交通費はReBitが負担してくれて、岩手から沖縄まで、20人以上が集まっていました。各地で活動しているユースリーダーということで、東京の人もけっこういました。年齢制限があって、確か24か25以下だったと思います。自分は、年齢制限ぎりぎりですし込むことができました。

理解を広めるために、とくに学校とつながりたいと思っていました。「セクマイ・ダイバーシティ栗原」を始めたのも、学校など、子どもたちが置かれている狭い環境のことがすごく気になっていた、ということがありました。でも、学校とつながるのは難しい。LGBTに限らずハードルが高いので、「しっかり考えてから」と思っていました。ReBitさんは、学校とつながって、積極的にスピーカーを派遣している団体だったので、ノウハウを学びたいと思っていました。

◆事業計画が実現する

研修では、ReBitのメンバーだけでなく、外部のメンターやアドバイザーが付いてくれました。そういう方々に助言を受けながら、やってみたい事業の計画を立てました。事業の仕組みは、自治体や学校、企業から「セクマイ・ダイバーシティ栗原」に「講師を派遣してほしい」と依頼が来たら、当事者スピーカーにつなぐ、というもので、冊子を作り、必要なものを揃え、実際に講師の人に声をかけるところまでやりました。スピーカーとして、仙台市で活動している小野寺真さんや「HOMEY」のあゆみくん、小浜さんに協力してもらっています。

2019年8月6日に第1回目が実現し、すごく嬉しかったです。栗原市の中学校の養護教諭の研修会に呼んでいただいて、講師は真さんに来てもらいました。最初は、真さんにお任せしようと思っていたのですが、役割を分担して、自分も少ししゃべりました。

「diverseeds」のときから「白鳥さんが講師をやってしまえば？」と言われていたのですが、まだ自分の知識量に自信がないし、肩書もない。当事者性も大事と思っていて、自分はいろいろなものが欠けています。スピーカーとしてすでに活動している方を呼んだほうが、先方も安心だと思いますし、自分としても効果があるんじゃないかな、と思うので、いまはこの形にしています。

5. 地域性のこと

◆生きづらさ

栗原市は、面積は宮城県内で最も広いのですが、8割は森林や田畑などの自然豊かな土地で、人口は6万人台です。学校の数は、小中高を合わせて30ないくらいです。近所の事情はみんな知っているようなところですね。家族で「ご近所の人がかようなことになっているんだって」といったことを話しますし、「クラスの〇〇ちゃんがかよう。家族はかよう」という

こともお互い知っています。情報共有をするのが当たり前みたいな感じですが。栗原市は、10の町村が合併してできた市で、元の「町村」単位で人間関係が濃いのではないかと思います。

栗原市は、自殺率が高いです。確か全国レベルの2倍で、宮城県平均や全国平均よりも高い状態です。メインは高齢者ですが、若年化も見られて、個人的には、誰もが生きにくい環境にあるんじゃないかな、と思っています。高齢化も進んでいて、一概には言えないのですが、高齢なほど LGBT やセクシュアリティなど、性的なものに対する偏見や差別意識も強い傾向にあるので、そこをどう理解してもらったらいいいのか、と思っています。栗原市は、不登校率も宮城県内で高いほうなのですが、何か事情がある人、マイノリティ性のある人は、すごく生きづらいんじゃないかな、ということは感じますね。

性別役割規範も、普通にあると思います。それが日本の平均と比べてどうなのかはわかりませんが。たとえば、市議会議員は男性しかいません。「くりはらチャレンジ L」で市長を呼ぶ機会があって、女性の議員がいないことについて市長に尋ねたとき、市長が「それは女性の意識の問題だと思う」というふうに言ってしまう。そう言ってしまえる雰囲気があるのだと思います。それを言える環境である、ということです。「くりはらチャレンジ L」のメンバーは、だいたい女性なのですが、「市議会議員と話をするとき、女性は厄介者扱いされる」と話していました。「男性がメインで、女性がサポート」といった雰囲気は、学校をふくめて、普通にある地域だと思います。

仕事がない、ということもあって、若者はどんどん仙台などの都会に出てしまうので、若者は減っています。「田舎暮らしも悪くない」と言う同級生もいますが、離れていく若者が多いので、やっぱり居心地は良くないんじゃないかな。楽しみもとくにないようなところですし、自分は、どちらかというと密な人間関係が好きでないので、仙台に来て、近所の人と関わりがないとか、街を歩いていても知らない人だらけ、といった環境は居心地がいいです。

福祉の仕事はあると思うのですが、栗原に戻る予定は、今のところないです。栗原で活動を始めるにあたって、戻ることも考えたのですが、やっぱり仙台がいいです。栗原は何もないし、時間の流れもぜんぜん違う。栗原にいと、時間に置いていかれているような気がします。しばらくは、仙台に生活の拠点を置いて、栗原で活動するというスタイルを維持したいです。仙台のほうがイベントも情報もたくさんあるので、仙台での学びを栗原で活かしていくことを考えています。

◆栗原市でやることの意義

栗原市には、同性パートナーとの婚姻を認めてほしい、という訴訟を起こしたトランスジェンダーの方がいらっしゃって、個人で活動をしている人はいたのですが、自分が立ち上げるまでは団体がありませんでした。仙台と比べると、LGBT が安心して使える環境や資源が栗原にはないので、チープな団体なのですが、ないよりはましかな、と思っています。

チラシやポスターを見て、「こんなのがあるんだ」と思ってもらえたら嬉しいです。「会ってみたい」とか交流会に関する問い合わせはありますし、最近だと商工会が配布したチラシを見て、「栗原市在住です」と連絡を下さった方もいます。『河北新報』の記事を読んで、手紙を下さった方もいました。その方は当事者ではないのですが、「何かしたいと思っている」

と書いてありました。栗原市に団体があるだけで、啓発やエンパワーメントになるし、栗原市以外の関連情報や資源の存在を知ってもらえると思います。

交流会や講座に来てくれる人は、「セクマイ・ダイバーシティ栗原」とつながるまでは、とくにどこともつながっていなかった、という人がメインです。「自分が何者かわからなかった」「でもチラシを見て、自分はこれに当てはまるんじゃないか、と思った」という方もいます。「自分と同じセクシュアリティの人に会ったことがない」「何のつながりもない」「自分だけなんじゃないかと思っていた」という方もけっこういますので、栗原でやる意義を感じます。

仙台は、集まれる場所など使える資源がたくさんあるのですが、栗原市は頼れるものが少ない。少ないけれど、「こことここを押さえれば何とかなる」という意味で、頼りになりますし、少し活動しただけで「変わった」という実感も得られやすいです。たぶん、自分が仙台で活動したら、他の団体との競争で負けると思うんです。団体としての活動の売りもとくにないです。でも、栗原なら独占企業です。

今、宮城県内の田舎に住む人たちとつながって、何かやろうという話も進んでいます。活動や理解の進んでいない地域にも、何かいい影響が及ぼせるのであれば、意義があるかなと思います。

◆移動は不便

市内は車がないと移動しにくいので、交流会に来るのも少しいへんです。だから、まだやったことはないのですが、自分が車で迎えに回ることも検討しています。運転に自信がないので、あまりやりたくないのですが、でも、足がなくて集まれない人もいます。中高生は、親に送ってほしい、と頼むわけにもいかないので、厳しいですよ。バスは本数が少ないせいか、バスを利用している、という話はあまり聞きません。基本は自家用車で、あとは、歩きか自転車か、という感じです。

まだきちんと調べていないのですが、栗原もデマンド交通を導入する予定があるとかで、そうすると、事情も少し変わってくるのではないかと期待しています。

6. 震災の影響

◆震災のときは栗原に

東日本大震災のときは、高校2年で、栗原市で震度7を経験しました。ラーメン屋の「幸楽苑」にいました。やっぱり怖かったですね。「いつも通り収まるだろう」と思っていたら、だんだん強くなって行って、何かにつかまっていなくて立ってられないし、ラーメンも水も全部こぼれて、「これ、やべえな」と思って。友達といたので、強がっていたのですが、信号機も含めて全てが停電になり、外に出たら車が事故を起こしていて、「これはちょっとまずいな」と思いました。

実家の家の中は、もちろんぐちゃぐちゃだったのですが、倒壊することはなかったです。家族も無事で、問題なかったです。栗原は地盤が強いらしくて、被害も少なかったというこ

とでした。

沿岸部のほうには、本当に落ち着いてから、南三陸や名取に行きました。ボランティアとして、友達とちょっと行ってみよう、という感じで出かけました。

◆震災と活動

2017年に『多様な性を生きる人のための 防災ガイドブック』を発行した「性と人権ネットワーク ESTO」さんや「レインボーアーカイブ東北」など、様々な団体や活動家の活動も拝見していたこともあり、震災と性的マイノリティの関係について関心があります。取り組んでいきたいと思いますが、栗原市の活動では、震災を意識した活動はしていませんね。

もちろん、東北のLGBT団体が震災をきっかけに増えた、というのは知っていて、個人的には、それを「カンブリア紀」と呼んでいます。種が突然、爆発的に増えた時代のことで、それぐらい多様な団体、活動が沢山増えた、ということです。震災後にできた団体か、震災前からある団体か、よく知らないのですが、小さくても個性のある多様な活動があるので、それぞれの活動から多大な影響を受けています。

多賀城市の「てんでん宮城」の交流会は、本が置いてあって、本を読むもよし、交流するもよし。直接的なコミュニケーションをメインにしないところにすごく惹かれています。自分もそうなのですが、話すことに抵抗のある人って、たくさんいます。だから、ただ集まって、話したいことがあれば話せる、ぐらいがいい。自分も「てんでん宮城」の真似をして、交流会のときに本を置いたりしています。まだ計画中ですが、何か手作業をするのもいいな、と思っています。みんなでレインボーグッズを作るとか。

それから「♀×♀お茶っこ飲み会」を主催しているMEMEさん(本冊子にインタビュー掲載)は、ブルー・オーシャンを、気持ちいいツボを探すのが得意な方だな、と思っています。バイセクシュアルやアセクシュアルの交流会とか、婚姻制度に異議を唱える人の交流会とか、面白い企画をやっている。みんなが拾わないところを拾うのって、すごく大事だなと思っています。

こんなふうに、いろいろな団体の活動を参考にして考えています。あと、東北は小規模な団体が多いので、「もしかしたら自分もできるかな」と思えたのは、そのためかもしれないです。

7. これまでの活動を振りかえって

◆成果

団体を立ち上げたことだけでも、意義があったと思います。それから、交流会でいろいろな人と出会えたこと、そのつながりからどんどん活動が広がっていることは、成果だと思います。

また、男女共同参画や、自殺対策を行う健康推進課などの行政とつながって、自治体の計画が変わったこと、市民の皆さんや「くりはらチャレンジL」の方と知り合って、アライが増えていったことなども、成果かなと思います。栗原市には「市長カフェ」というのがあっ

て、市長と直接話ができる機会があります。そこに参加して市長とお話しました。市議会のほうにも顔を出して、質問をしたり、自分の活動をアピールしたりしたら、市議会でも「性的マイノリティの対策はどう進めていくのか」という話が出ました。

実際に学校につながれたことも、成果だと考えています。中学のときの先生が、いま宮城県の共同参画社会推進課で働いているのですが、自分が団体を始める前からLGBTの課題を知っていて、小浜さんなどの活動家ともつながっていて、いろいろなところで関わっていただきました。そういう方とも改めてつながることができて、アライとして協力してくださる人も出てきました。「セクマイ・ダイバーシティ栗原」という看板があると、若干、信頼度が増して、つながっていける。不思議ですね。

◆課題

まだ始まったばかりだと思っています。学校とつながった、と言っても、養護教諭の研修会を1回やっただけなので、これから継続的に取り組んでいきたいです。それから、当事者の人とあまりつながっていない、という課題があります。交流会を、当事者が安心してつながれる場にしていきたいです。

活動は、ほぼ1人でやっています。だから意見の対立もないですし、今のところ、気楽と言えば気楽。でも、交流会や講座に参加してくれた人や、栗原周辺でつながった人で何か一緒にしよう、という話はしています。

自分もちょっと忙しいので、やるが増えてくると限界を感じて、手伝ってくれる人がいてくれるといいな、と思うことはあります。あと、自分は当事者性がないので、当事者の人に協力してもらって、その人メインで交流会を開いてもらうとか、同じセクシュアリティの人と話したいというニーズに対応してもらおうとか、そういったことをしてくれないかなあと期待しています。

◆支援からまちづくりへ

「セクマイ・ダイバーシティ栗原」は、最初は「LGBT支援」をテーマにしていたのですが、今は「まちづくり」というふうにテーマを変えています。2020年度からは、団体名を「Color Calibrations（カラー・キャリブレーションズ）」に改めて活動していきます。カラー・キャリブレーションは、直訳で色彩調整であり、「社会の側を調整することによって、本来の色、つまり性の多様性を取り戻す」という意味が込められています。活動はあまり変わらないかもしれませんが、社会的な視点をもって活動したい。当事者の人を助ける、というよりは、当事者の人が自分らしくいられる「まちづくり」のほうをしていきたい、と思っています。栗原のあらゆる社会資源を、多様な性をもつ人が使えるものにしていく。栗原にない社会資源は「セクマイ・ダイバーシティ栗原」のイベントや情報発信で補っていく、というふうに、今は考えています。

もともと「支援」ということには違和感がありました。支援の対象者は、支援されたいわけではないし、そういう「福祉」や「支援」に抵抗を感じている人は、自分も含めて多いと思います。「支援」というのは、見下している、というか、何か対等でない感じがして、し

っくり来ていなかったんです。

テーマを変えたのは、いま福祉を勉強していて、改めて社会的な視点が大事だな、と思ったこともあります。当事者を、支援が必要な人にするのではなく、町のほうを変えていく。町のほうを当事者が使いやすいものにしていくべきなんだな、と思って、視点を切り替えました。